

# The Frankenstein Monster

この作品は、ロンドンのロイヤル・ナショナル・シアターで2011年に公演された“フランケンシュタイン”を鑑賞するなかで、作中の創造主ビクター・フランケンシュタインと彼が生み出したモンスターの役柄が入れ替わって演じられるそれらなどからまたモンスターはどちらかなど、私の心の記憶にある感情と実際の出来事から、思想にリンクされ、モンスターへの共感と同調さらにそこから湧き出る心像を詩にしたこと事から創作がはじまりました。

そして今回は思い書き音へつながり伝える、その心の表現のループを示したいと、書から詩その朗読そこから曲へ向かい道具となる「素材と表現方法」の両方からの循環を作品提示しております。

これは、芸術の体系(鶴見俊輔「限界芸術論」より)、行動の種類と芸術のレベルとして「書く→読む」と定義すると書道は限界芸術に詩は純粋芸術に概念されています。

私は書がこの鶴見氏の定義する限界芸術とくくる概念だけではない表現の延長として皆様にお伝えする作品とできればと考えています。

まず書の技術的な面から、「文字を書く」という記号を伝える行為だけでなく、交響曲や民曲またバレエなど道具(身体や楽器、筆)を使ったスキル習得を書も臨書の過程をへて、白と黒を空間に配置する中で、その道具との関係、生成された線の理解と研磨が作品製作において必要とされます。純粋芸術で必要とする要素や行動レベルを書においても段階的に必要とし習得します。この分かれ目は書を線で読む鑑賞ができるかどうか、また概念の分類をする場合に書家が埋め得る視点と発展の提示と存じます。筆跡鑑定に書家が採用されてきた理由とも通じます。

今回の作中詩は鉛筆を使っております、書は筆と墨を使うという哲学に一般的におもわれていますが、実際鉛筆の動きというのは筆先の流れがどこに来るかというロードマップとして現れ、私たち書家には筆先の動きがかたちを先導するため頭では筆が動き線を生成しています。筆尻や強弱で筆の線のテクニックを包括して墨と筆の場合は別の技術が加わりますが、筆先がどこへ動くかという点は鉛筆も筆も大差ない物です。

非専門的芸術家によって製作されると概念された書く行為も専門的享受者(書家)が見る場合、限界芸術の幅を論ずる視点とお伝えできればとおもっております。同時に書の鑑賞が難しいとされるのも、この線をとらえる目を必要とするためといえるのかもしれませんが、それは非専門的芸術家によって製作され非専門的享受者によって受け取られる「限界芸術」と鶴見氏が書を位置づけた理由でしょうが、それこそが書家の視点から発展させられる私が身につけた技術です。

また鶴見氏の見解の流れから、書くことから読む事。またそこから発展させ文字は声になり声は曲へ向かい伝える。この一連の流れを作品反映させることは、今回の作品製作過程の「心に浮かぶイメージから、書く(書)言葉とする(詩)音とする(朗読)奏でる(曲)それから心情に戻る」そういった素材からの一連の人の心の表現方法とそのループを、そして書が心像を作品とする最もわかりやすい例として詩(言葉)を見せる事にしました。そして書くことが芸術となりえるか、限界芸術からの脱皮は不断の進歩と研磨と励んでおります。

音についてお話ししますと、今回の音楽は吉村勇作さんに参加いただきました、彼は私の詩とその感情をもとに音の製作をすすめながら、詩のリズムなどもミックスする中で曲へ仕上げ、それを一連の作品のループへ融合させております。そして音響の小杉工房「能登ヒバ真空管アンプスピーカー」を製作くださった小杉剛司さんは聞くための道具を、「伝える」を形として協賛くださいました。さらにこの音響が加わる事で「聞く→伝える」の工程を表現することができました。音(奏でる→聞く→伝える)をかたちにしてくださった2人には深い尊敬から敬意を持ち、この場を借りてお礼申し上げます。

今回の英語版翻訳に力をかしてくれたWesさん、Jeff、何時も私のつたない言語を世界につれていってくれて、ありがとう。

最後に、世界がコロナ危機に直面している困難の中でもこうして作品を発表し、皆様にご覧いただける事に感謝いたします。

23  
書道家、現代美術家  
<https://www.232323.org>

吉村勇作  
ボストンパークリー音楽大学後、ボ  
ストンを拠点にキーボーディストと  
してアメリカ国内外活動中

小杉剛司  
北陸先端科学技術大学院大学  
情報科学修士、独自回路技術を基に音  
響機器製造小杉工房設立

2020.Spring - 23

